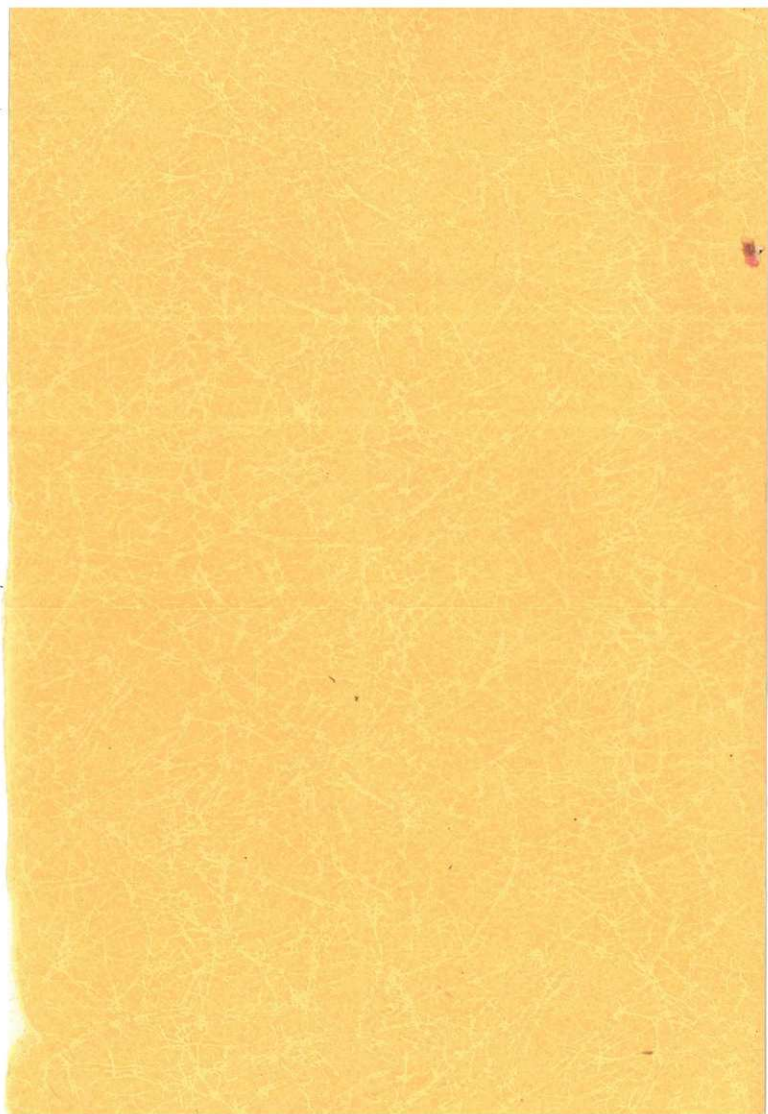


# 鳥見ヶ谷横穴群発掘調査報告書

1990

大東町教育委員会







# 鳥見ヶ谷横穴群発掘調査報告書

1990

大東町教育委員会



## 序

小笠郡内を流れる菊川流域は、昔から古墳の多い地域として知られています。この流域に含まれる私たちの町、大東町の左東地区にも多くの古墳が確認されています。

今回、同地区内鶴山下工業研究所の工場用地拡張工事に先立ち、鳥見ヶ谷横穴群の発掘調査が実施されました。その結果がここにまとまりましたので刊行いたします。

発掘調査では8基の横穴が調査され、須恵器などの土器をはじめ、首飾りの玉類や刀などが出土しました。こうした遺物により、この地域における古墳時代の人々の姿を明らかにする上で大きな前進をみました。今後は、町の財産として大切に、広く皆さんに活用していただけるようにしていきたいと思います。

最後になりましたが、埋葬されていた方のご冥福をお祈りするとともに、調査にあたって色々ご協力していただいた鶴山下工業研究所をはじめ、発掘関係者など多くの皆様に心から感謝を申し上げます。そして、本書が郷土理解、郷土愛のいっそうの前進に役立てば幸いと存じます。

平成元年3月

大東町教育委員会

教育長 青野行雄

# 例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡大東町中方に所在した鳥見ヶ谷横穴群8基の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社山下工業研究所の協力を得て、大東町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、昭和63年7月の確認調査を経て、同年8月5日から9月15日まで実施した。
4. 調査は、渡辺康弘（早稲田大学）が中心となり行ない、中山俊之（元大東町教育委員会）が補佐した。また、調査には、猪俣桂二、木場幸弘、岩並健太郎、水野敏典、林弘之、安島真一、井澤純、辻史郎、金子智の参加を得た。

本書の執筆は渡辺が行った。

5. 調査にかかる事務は、大東町教育委員会が行ない、同教育委員会が資料を保管している。



# 目 次

序

例 言

目 次

1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 環 境 .....	1
3. 調査の目的と方法 .....	4
4. 調査の経過 .....	5
5. 横穴群の調査 .....	7
A群横穴群 .....	7
1号横穴 .....	7
2号横穴 .....	8
3号横穴 .....	9
B群横穴群 .....	11
4号横穴 .....	11
5号横穴 .....	12
6号横穴 .....	12
7号横穴 .....	14
8号横穴 .....	14
6. 考察 横穴と石室墳の形態をめぐって .....	18
7. まとめ .....	22

## 插图目次

第1图	位置图	2
第2图	环境图	3
第3图	鳥見ヶ谷横穴群詳細環境図	4
第4图	A群横穴群配置図	5
第5图	B群横穴群配置図	6
第6图	A群1号横穴実測図	7
第7图	A群2号横穴実測図	8
第8图	A群3号横穴実測図	10
第9图	B群4号横穴実測図	11
第10图	B群5号横穴実測図	12
第11图	B群6号横穴実測図	13
第12图	B群7号横穴実測図	14
第13图	B群8号横穴実測図	15
第14图	遺物実測図1	16
第15图	遺物実測図2	17
第16图	玄室比較図	20

# 図版目次

- 図版Ⅰ 1. 確認調査  
2. A群3号横穴発見状態  
3. 現地説明会
- 図版Ⅱ 1. A群1号横穴玄室状態  
2. A群1号横穴石棺状態  
3. A群1号横穴正面状態
- 図版Ⅲ 1. A群2号横穴正面状態  
2. A群2号横穴開口部状態  
3. A群2号横穴遺物出土状態
- 図版Ⅳ 1. A群3号横穴正面状態  
2. A群3号横穴開口部封鎖状態  
3. A群3号横穴封鎖状態（上から）  
4. A群3号横穴玄室内壁状態
- 図版Ⅴ 鳥見ヶ谷横穴群B群全景
- 図版Ⅵ 1. B群4号横穴開口部状態  
2. B群4号横穴玄室内状態  
3. B群4号横穴石棺西側状態
- 図版Ⅶ 1. B群4号横穴石棺東側状態  
2. B群4号横穴石棺掘り方状態  
3. B群4号横穴玉類出土状態  
4. B群4号横穴須恵器出土状態  
5. B群4号横穴封鎖部状態（上から）
- 図版Ⅷ 1. B群5号横穴  
2. B群6号横穴開口部状態  
3. B群6号横穴奥壁状態
- 図版Ⅸ 1. B群7号横穴  
2. B群8号横穴玄室状態  
3. B群8号横穴側壁加工痕
- 図版Ⅹ 1. B群8号横穴羨道部状態  
2. B群8号横穴玉類出土状態  
3. B群8号横穴封鎖状態  
4. B群8号横穴須恵器出土状態  
5. B群8号横穴刀子出土状態
- 図版Ⅺ 出土土器



# 鳥見ヶ谷横穴群発掘調査報告書

## 1. 調査に至る経緯

静岡県小笠郡大東町は、南は遠州灘に面し、北の掛川市には日本の大動脈東海道が通る所に位置している。こうした交通の便利さと自然に恵まれた特長を生かし、近年、町発展のために企業誘致をさかんにやり、多くの企業が立地してきている。また、それに伴い人口も増加する傾向にあり、さまざまな開発とともに埋蔵文化財の発掘調査も年々増えてきている。

こうした状況の中で、大東町中方656番地の嶺山下工業研究所が業務拡大に伴い既存の工場では手狭になったため、工業用地拡張の計画がなされた。

これを受けて、大東町教育委員会が文化財所在の有無を調査した結果、施工区域内には静岡県遺跡地図に鳥見ヶ谷横穴群が記載されており、現地においても既に開口している横穴4基を確認した。また周辺には、他に横穴の存在する可能性がある地点も確認した。

この結果をもとに、町教育委員会は静岡県教育委員会文化課の指導のもと、嶺山下工業研究所に対し遺跡の現状保存を依頼したが、協議の結果、横穴群の存在する地点だけ工場用地からはずすということは、台地斜面部のみが、隣接している人家裏に残ることになり、大幅な計画変更が生じるため不可能であるという結論に至り、記録保存による発掘調査を実施することとなった。

その後、嶺山下工業研究所より法第57条の2第1項により埋蔵文化財の届出を受け、昭和63年6月25日付で法第98条の埋蔵文化財の周知とともに県文化課へ提出した。

また、当初確認された4基の横穴の分布状況から、横穴群が2区域で構成されていると考えられ、その周辺で他の横穴が存在する可能性が高い地点の確認調査を昭和63年7月18日から県文化課の指導を仰ぎながら実施した。

昭和63年7月30日付で嶺山下工業研究所と大東町の間で発掘調査委託契約書を締結し、同年8月5日から本調査を実施した。尚、鳥見ヶ谷横穴群東端の横穴については、工業用地拡張計画区域からはずれているため、調査対象から除外した。

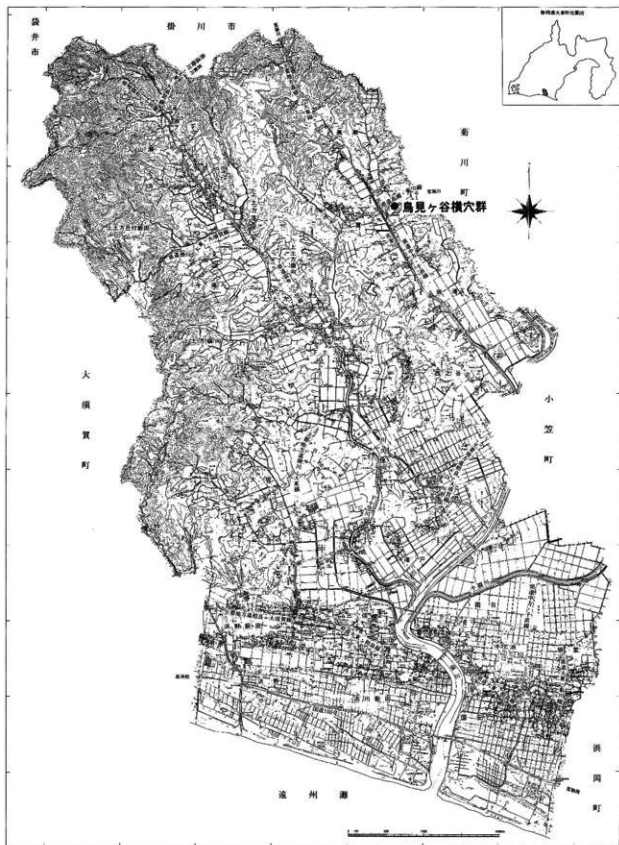
## 2. 環 境

横穴群が占地する台地の周辺には同時代の横穴が数多く営まれていて墓域を形成し、これらを取り囲む水田域が古代からの生産域であり、また、河川が形成した自然堤防上が主に集落域である。

鳥見ヶ谷横穴群は、A群の1～3号横穴およびB群の4～8号横穴からなっている。また、用地外に一群が想定でき、尾根の南側斜面に所在する横穴群の数は更に増えよう。

A群の分布は舌状に南西に延びる細尾根の南側斜面に開口していて、B群に比較してそれぞれの横穴群相互の間隔が広いが、ともに主軸が西に偏している。比較的長い羨道を有する1号横穴が比較的古いと思われる、相互の連絡については、2、3号横穴には墓前域が傾斜していて階段が備わっていることから、墓道は、更に低位置を通っているものと思われる。

B群の分布は、密集しており、発見された順に番号を付した。ともに南面して開口する横穴群であり、共有する墓前域を検出することができなかった。形態と出土遺物から8号横穴が最初に造営されたと考えられる。また、比較的古い段階の4、6、8号横穴の主軸方位が西に偏して類似しているのに対し、新期の5、7号のそれが真北に近く類似している。



第1圖 位置圖

第1表 周辺の遺跡

1	鳥見ヶ谷横穴群	20	じょうげん1号墳
2	中方遺跡	21	高天神城跡
3	山崎横穴群	22	中方北遺跡
4	山田ヶ谷A横穴群	23	松ヶ谷横穴
5	中方B横穴群	24	清水ヶ谷横穴群
6	中方A横穴群	25	城山遺跡
7	毛森山一の谷C横穴群	26	ハッ谷横穴群
8	毛森山一の谷B横穴群	27	穴口横穴群
9	毛森山勝田ノ谷横穴群	28	山脇横穴群
10	毛森山一の谷A横穴群	29	興禰庵横穴群
11	猫田横穴群	30	毛森山一の谷F横穴群
12	田ヶ谷B横穴群	31	毛森山一の谷H横穴群
13	田ヶ谷A横穴群	32	毛森山一の谷G横穴群
14	田ヶ谷C横穴群	33	高瀬遺跡
15	火ヶ峰横穴群	34	天王前遺跡
16	玉体横穴群	35	天王谷横穴群
17	丸山古墳	36	山田ヶ谷B横穴群
18	笹ヶ谷横穴群	37	金比羅山古墳
19	じょうげん2号墳		



第2図 環境図

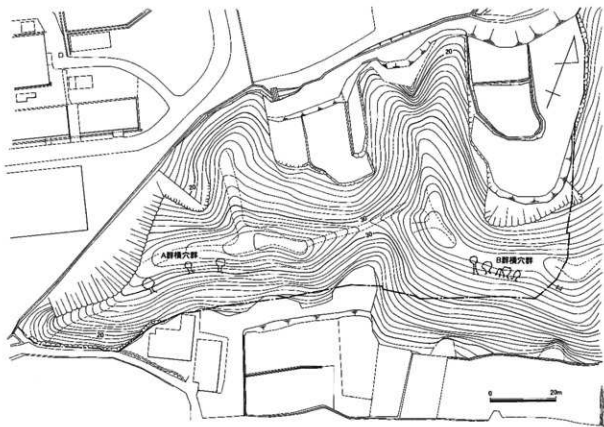
### 3. 調査の目的と方法

既に述べたように、町教育委員会は、彌山下工業研究所と本横穴群の取り扱いについて協議を重ね、確認調査で確かめられた7基の横穴について記録保存を目的として発掘調査を実施することにした。

本調査は、当初、昭和63年8月5日から30日までの延べ25日間を費やして現地調査を行うことにしたが、8号横穴の発見により9月15日まで断続的に調査を行うことになった。

調査方法は、それぞれ離れて分布するA群（1～3号横穴）とB群（4～8号横穴）に分けて呼称することにし、まず、B群横穴群から調査に着手し、そこに水洗選別用の機材とテントを設置した。また、A群については、その排土量が多量であり、樹木の抜根もあって重機を用いることにした。特に、1号横穴については、横穴天井部の落盤とそれに起因した多量の崩落土の除去に重機を活用した。

遺構実測図は、10分の1を原則として作成し、写真撮影には6×7判、35ミリ判mのカメラを用い、白黒・カラースライドフィルムを使用した。

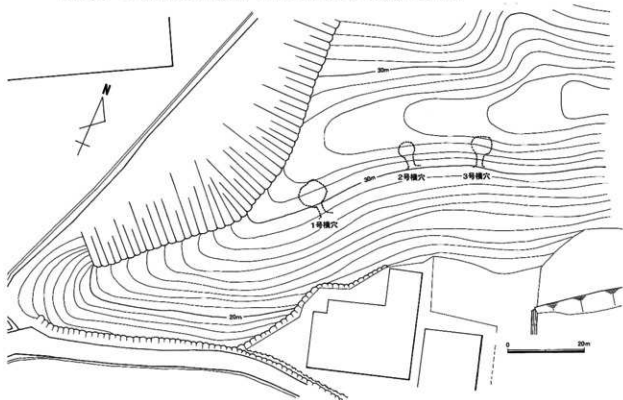


第3図 鳥見ヶ谷横穴群詳細環境図



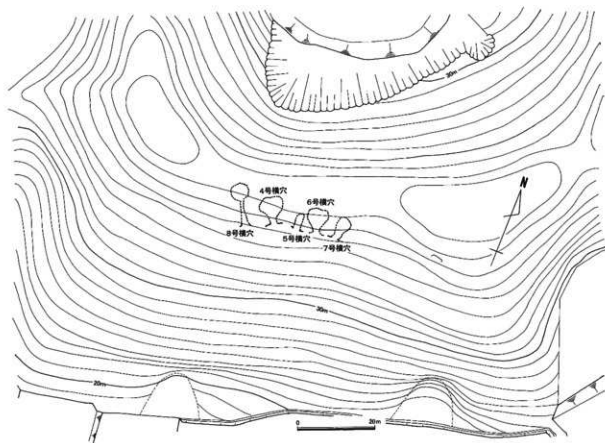
#### 4. 調査の経過

- 63年8月5日 午後から現地調査を開始する。調査着手時には、7号横穴が既に開口していた。重機と人力により、B地区の横穴を確認するために表土剥ぎを行う。4号、5号、6号横穴発見。
- 8月6日 4号横穴は天井部が崩落している。封鎖石検出。5号横穴玄室内排土、玄門区画溝検出。6号横穴玄室内排土、墓前域排土。7号横穴玄室内排土。
- 8月7日 4号横穴封鎖部精査、写真撮影。5号横穴で天井が崩落。6号横穴玄室内排土。横穴の中央部に炉跡状の石囲いを検出し、天井には線刻があり、一部が焦げていて、後世の再利用を確認した。墓前域前端を土橋状に埋めていた。7号横穴玄室内の排土がほぼ完了し、封鎖石を精査して、多くのものは原位置を止めていないことを確認する。玄室床面直上の土を水洗する。
- 8月8日 4号横穴封鎖石実測、5号横穴完掘。6号横穴実測、墓前域排土。重機にてA群の排土を開始する。3号横穴墓前域の排土着手。
- 8月9日 4号横穴封鎖部の実測を終了し、封鎖石を取り除く。5号横穴玄室内精査。6号横穴実測。7号横穴実測。
- 8月10日 雨天のため現場作業中止。
- 8月11日 4号横穴崩落土除去。5号横穴実測。6号横穴墓前域の清掃と天井コンタ実測。
- 8月12日 作業休止
- 8月13日 4号横穴の封鎖部から耳環1点出土。天井崩落部と樹根除去。5号横穴断面図作成し、実測完了。6号横穴実測完了。7号横穴断面図作成し、実測完了。3号横穴墓前域排土。
- 8月14日 2号横穴玄室内排土。午後から降雨のため現場作業休止。



第4図 A群横穴群配置図

- 8月15日 1号横穴排土。2号横穴排土墓前域を検出し、玄室床面の排土を完了、床面直上の土壌のサンプリングを行った。3号横穴排土。
- 8月16日 2号横穴平面実測図作成。3号横穴玄室内排土。午後降雨のため作業中止。
- 8月17日 2号横穴断面図作成。3号横穴排土完了。
- 8月18日 2号横穴玄室の実測完了。3号横穴実測図作成。
- 8月19日 1号横穴排土。3号横穴断面実測図作成し封鎖部を実測、写真撮影を行う。
- 8月20日 1号横穴実測。
- 8月21日 1号横穴実測図作成。3号横穴天井コンタ図作成。4号横穴排土。8号横穴排土。
- 8月22日 2号横穴天井コンタ図作成。3号横穴実測完了。4号横穴玄室内排土、組み合わせ式箱式石棺と礎床検出。須臾器出土。
- 8月23日 2号横穴墓前域実測。4号横穴玄室内排土。8号横穴玄室内排土。
- 8月26日 8号横穴封鎖石実測。
- 8月27日 1～3号横穴写真撮影。
- 8月30日 4号横穴実測図作成。
- 8月31日 4号横穴実測、4号、6号、7号横穴写真撮影。
- 9月1日 4号横穴断面図作成。8号横穴封鎖石見通し図及び断面図作成。
- 9月2日 8号横穴実測、写真撮影。
- 9月3日 8号横穴遺物出土状態実測。写真撮影。
- 9月9日 8号横穴天井部コンタ図作成。6号、7号横穴実測図。全体写真。
- 9月15日 4号横穴石棺解体。作業終了。



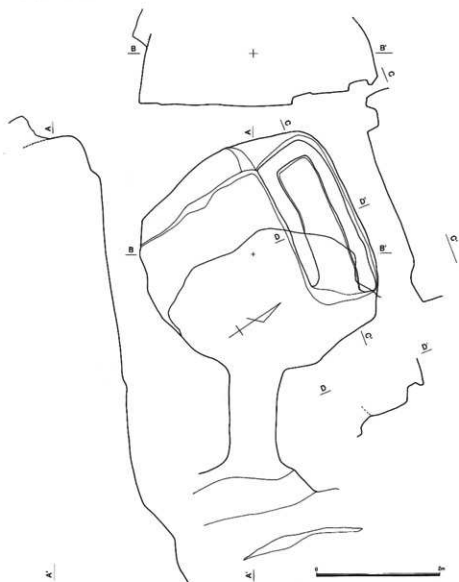
第5図 B群横穴群配置図

## 5. 横穴群の調査

### A群横穴群

#### 1号横穴

1. 位置 本横穴はA群の横穴群の中でも最も西に位置し、2号横穴から西へ約13m離れている。  
調査着手前に大きく崩落していた。
2. 玄室 本横穴の玄室は、風化があり遺存状態は良好でなかった。主軸方位はN-53°30' -Wをとり、玄門部から奥壁までの玄室長は3.82m、玄室最大幅は3.58m、玄室高は、不明である。  
平面プランは拡張を繰り返した結果、隅丸の略方形に近い。  
床面は奥壁に最大幅0.5m程度の平坦面を設け、開口部に向かって緩やかに傾斜し、また、玄室床面は横断方向で広くほぼ平坦面が確保されている。
3. 埋葬施設 東側の側壁に沿って造りつけの石棺が設けられている。石棺は内法で長さ2.3m、幅0.5mほどで、棺の側壁は幅20~26cm、内法高さ14cmほどであった。また、奥壁の平坦面も棺台であった可能性がある。

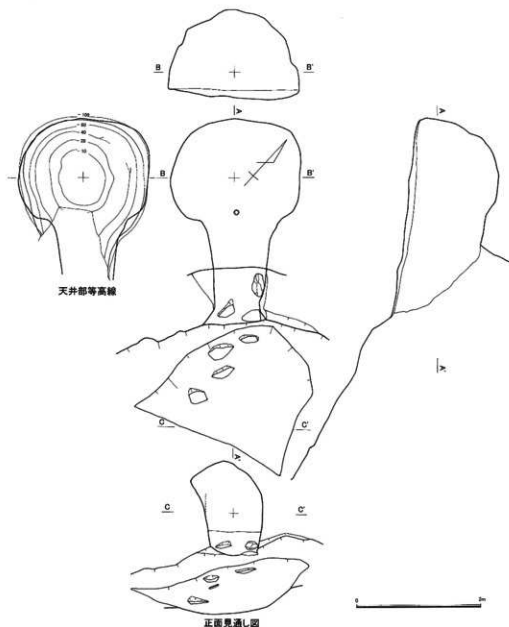


第6図 A群1号横穴実測図

4. 羨道 羨道は、B群8号横穴に比べると短いものの、開口部に向かって幅を減じることはない。中程で0.7mを測り、羨道部長1.46mを測る。その高さは崩落していて不明である。
5. 排水溝等施設 無い。
6. 封鎖施設 無し。
7. 墓前域 不明。
8. 工具痕の観察 風化していて不明。
9. 遺物 須志器坏蓋破片（第15図1～4）が4点埋土中から出土している。

## 2号横穴

1. 位置 本横穴は1号横穴の東約13m、3号横穴の西8mに位置し、1号横穴と3号横穴の開口レベルも中間にある。調査着手前に既に開口していた。



第7図 A群2号横穴実測図

2. 玄室 本横穴の玄室は、多少の崩落や風化があるが遺存状態は良好であった。主軸方位はN-42°-Wをとり、開口部から奥壁までの玄室部全長は3.26m、玄室長は1.63m、玄室最大幅は2.60m、玄室最大高は、1.43mを測る。

平面プランは隅丸の略方形に近く、天井はドーム形を呈する。

床面は開口部に向かって緩やかに傾斜し、また、玄室床面は中央部が窪むように造られている。

天井は天井頂点を0としてこれより10乃至20cm低い等高線を測定したが、大凡玄室側壁プランと相似形をなすが、比較的高所の等高線も羨道部に向かって流れている。

3. 遺物 須恵器杯1点が床面から出土して、埋土中から須恵器片2点と山茶碗（第15図10）1点、山小皿（第15図5～9）5点と刀子と思われる鉄製品1点が出土している。鎌倉時代の再利用が考えられる。
4. 羨道 羨道は、開口部に向かって幅を減じていて、最も狭い開口部で0.68m羨道部長1.63mを測る。その高さは崩落して不明である。
5. 排水溝等施設 無い。
6. 封鎖施設 川原石によって封鎖されていたが、1点のみが残存していた。また、川原石は墓前域の埋土中からも出土していて、封鎖に用いられたものと思われる。
7. 墓前域 正確な規模は不明であるが、幅は約2.86mの略半円形の平面形を呈する。比較的急峻な墓前域には階段を造って玄室と繋がっていて、右側墓前域から玄室に登ったことが分かる。
8. 工具痕の観察 本横穴の壁面はかなり風化しているが、ツルハシ状の工具とノミ状の工具の痕跡を認めることができた。特に後者は幅約1.7cmを測る。両方とも壁面に向かって右上から左下方向への運動が観察できた。

### 3号横穴

1. 位置 本横穴はA群横穴群でも最も東に位置し、2号横穴から8mほど離れている。調査着手前に既に開口していた。
2. 玄室 本横穴の玄室は、多少の崩落や風化があるが遺存状態は良好であった。主軸方位はN-17°-Wをとり、開口部から奥壁までの玄室部全長は3.97m、玄室長は2.54m、玄室最大幅は2.94m、玄室最大高は、1.70mを測る。

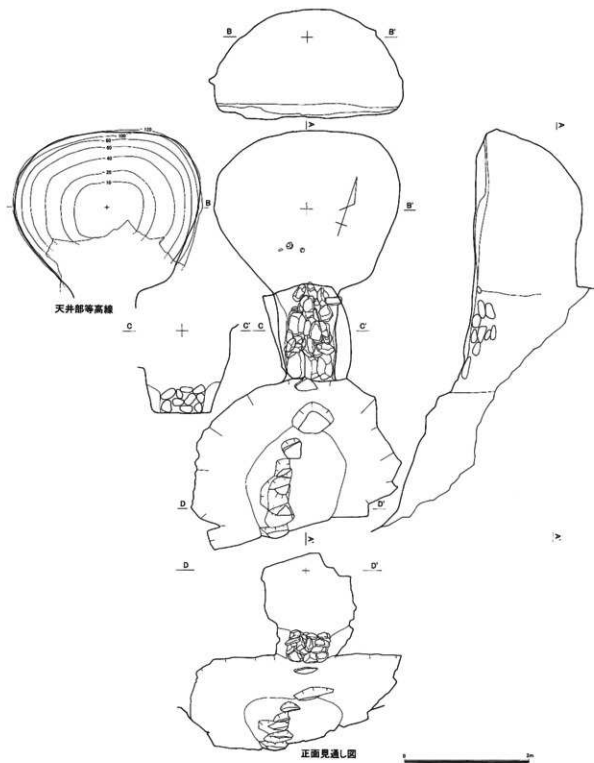
平面プランは丸底フラスコ形に近く、天井はドーム形を呈する。B群6号横穴と大きさが近似する。

床面は奥壁の内側に西側に偏して、幅0.6～0.9m、高さ10cmほどの帯状の貼床が認められた。平面的に掘むことが困難であったが、棺台であろうか。

天井は、天井頂点を0としてこれより10cm毎の低い等高線を測定したが、略円形のドーム形が相似形をなしていると看取できる。高所半ばまでの等高線も同心円形を呈していて、比較的古い形態といえそうである。

3. 遺物 須恵器碗（第15図11・12）2点が床面から出土している。特に12の碗は焼成前に変形させたもので、町内の横穴群に類例をみる。
4. 羨道 羨道は、開口部に向かって幅を減じていて、最も狭い開口部で0.68m羨道部長1.63mを測る。その高さは崩落して不明である。
5. 排水溝等施設 無い。
6. 封鎖施設 川原石によって封鎖されていて、3段を認めた。封鎖に際しては、まず地山を切り出したブロックを壁にたててから、その内部に封鎖石を収めている。

7. 墓前域 正確な規模は不明であるが、幅は約3.36mの略半円形の平面形を呈する。急峻な墓税域には、右側から階段を造って玄室と繋がっている。



第8図 A群3号横穴実測図

## B群横穴群

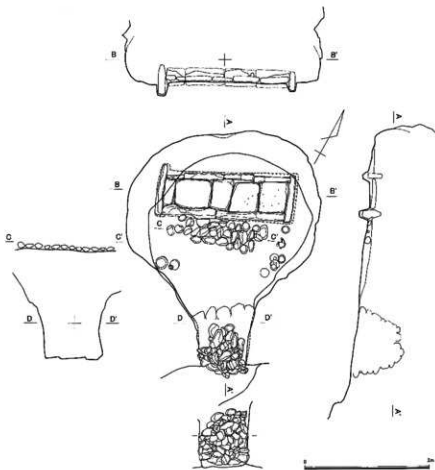
### 4号横穴

1. 位置 本横穴は8号横穴と5号横穴の間に位置し、右側墓前域は段差をもって8号横穴と画されている。

2. 玄室 本横穴の玄室は、天井がほとんど落盤していて、調査前にも窪地であった。しかし、崩落が早い時期であったためか、床面と封鎖部の遺存状態は良好であった。主軸方位はN-28°30'-Wをとり、開口部から奥壁までの玄室部全長は3.76m、玄室長は右側壁側で3.0m、玄室最大幅は3.06m、玄室最大高は、不明である。

平面プランは丸底フラスコ形近く、見方によっては隅丸の方形に近いともいえる。天井はドーム形を呈するであろう。

床面は開口部に向かって緩やかに傾斜するものの、平坦面は比較的確保されているといえよう。



第9図 B群4号横穴実測図

3. 埋葬施設 玄室の奥壁側に組み合わせ式箱式石棺が1基、その開口部側に礎床が1基設けられていた。組み合わせ式箱式石棺は、長軸を横穴主軸にほぼ直交させ、長径1.18m、短径0.75m、小口板が短径を上回る形態の石棺である。ちなみに内法は、1.94mと西側短辺で0.42m、東側で0.52mであり、西側が狭く、また、玉が東に偏して出土していることから頭位が東にあったと推測される。石棺構成材の上端のレベルを水平に調整していて、棺床までの深さは10cmを測る程度であり、蓋石はない。石棺堀方に青灰色粘土を敷いてレベル調整をおこなっていた。

一方、礎床は、拳大の川原石を敷き並べたもので、長さ1.6m、幅52cmの範囲に、これも東側を

幅広くするように敷いていた。従って、等位方向は東になろう。さらにその礫床の周囲に2群に分かれて土器が片づけられていた。

4. 羨道 羨道は、開口部に向かってわずかに幅を減じていて、最も狭い開口部で0.73m、左側壁側で羨道部長1.04mを測る。その高さは崩落していて不明である。
5. 排水溝等施設 無い。
6. 封鎖施設 川原石によって高さ0.8mまで封鎖されていて、羨道部の高さを示しているのであろう。封鎖石の中から管玉が1点出土した。
7. 墓前域 正確な規模は不明であるが、幅は約0.7mの帯状に平坦面が認められて、墓前域の奥端と考えられる。
8. 工具痕の観察 本横穴の壁面と床面の境には、ツルハシ状の工具とノミ状の工具の痕跡を認めることができた。両方とも壁面に向かって右上方から左下方向への運動痕跡が観察できた。
9. 遺物 須恵器環（第15図13）4点、土師器環（第15図14）1点、須恵器広口壺（第15図15）1点（以上東側の土器群）と平瓶（第15図16）と提瓶（第15図19）1点（以上西側土器群）が床面から片づけられた状態で出土している。

また、石棺内から耳環2点と玉が滑石製白玉（第14図12）1点、碧玉製管玉1点、メノウ製勾玉1点、滑石製勾玉（第14図3）1点、ガラス玉9点、水晶製切子玉1点及び、両頭金具1点、刀子片1点、さらに石棺と奥壁の間から大刀が1点出土している。

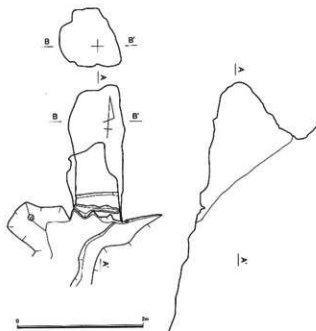
## 5号横穴

1. 位置 本横穴は4号横穴と6号横穴に挟まれて位置する。
2. 玄室 本横穴の玄室は、鳥見ヶ谷横穴群の中でも最も小型の横穴である。主軸方位は $N-4^{\circ}-W$ をとり、開口部から奥壁までの玄室部全長は2.20m、玄室長は1.94m、玄室最大幅は0.90m、玄室最大高は、残存値で0.76mを測る。

平面プランは略方形で、天井は平らである。

床面は開口部に向かって緩やかに傾斜し、奥壁から1.6mほどまでは平坦であり、幅30cmの溝に接している。この溝は恐らく封鎖施設であると考えている。

3. 羨道 羨道は、認めることができなかった。
4. 排水溝等施設 無い。
5. 封鎖施設 川原石による封鎖はない。
6. 墓前域 明瞭に墓前域を設けているとは言いがたい。また、開口部両脇には、1.35mの幅で径4cmほどの小ピットを認めた。には階段を造って玄室と繋がっている。
7. 遺物 出土しなかった。



第10図 B群5号横穴実測図

## 6号横穴

1. 位置 本横穴は5号横穴の東約2.5m、3号横穴の西2.8mに位置し、5号横穴と7号横穴の中間にある。

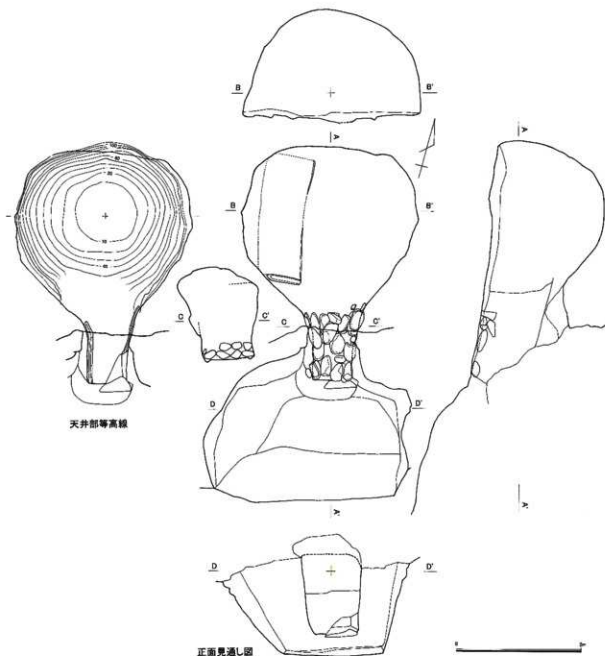


2. 玄室 本横穴の玄室は、遺存状態は良好であった。主軸方位はN-15°-Wをとり、床面での開口部から奥壁までの玄室部全長は3.73m、玄室長は2.86m、玄室最大幅は2.82m、玄室最大高は、1.78mを測る。

平面プランは奥壁が幅広の平底フラスコ形に近く、天井はドーム形を呈する。

床面は開口部に向かって緩やかに傾斜し、奥壁側が比較的窪んでいる。また、玄室床面は横断面で見ると、中央部が窪むように造られている。

特筆すべき点は、本横穴がA群の2号横穴とプランが重なる点である。細部の形態は相違するものの、玄室の長さや最大幅等の主要な値は一致しているのであり、同一の企画によっていると見てよい。すなわち同時期に造られたと考える所以である。



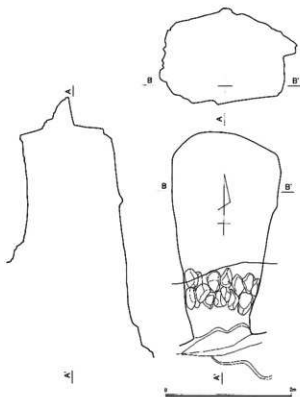
正面見出し図

第11図 B群6号横穴実測図

3. 埋葬施設 玄室右半部に、長さ1.92m、幅0.6mを推定し、高さ4cmほどの棺台と考えられる平坦な造りだしを認めた。その軸は大凡中軸に沿ったもので、開口部側の短辺には、長さ54cm、幅10cm、深さ5cmほどの溝が認められ、その中から2点の尖根式鉄鏃が出土した。
4. 羨道 羨道は、開口部に向かって幅を減じていて、最も狭い開口部で0.68m、羨道部長1.63mを測る。その高さは崩落して不明である。
5. 排水溝等施設 羨道部でも封鎖部分の両側壁に沿って排水溝を認めた。
6. 封鎖施設 川原石によって封鎖されていて、2段が残存していた。
7. 墓前域 開口部近くで、幅は約1.5m、長さ0.9mの略方形の平面形を呈する墓前域を造る。床面は傾斜している。また、開口部左隅に階段を設けている。
8. 工具痕の観察 本横穴の壁面には、幅6cmの曲刃ノミと幅3cmの先端が尖るノミを視察した。
9. 遺物 尖根式鉄鏃2点が出土している。

## 7号横穴

1. 位置 本横穴は6号横穴の東約2.8mに位置し、B群横穴群の中でも最も東に位置する。
2. 玄室 本横穴の玄室は、遺存状態は良好であった。主軸方位は主軸方位 $N-0^{\circ}-W$ をとり、開口部から奥壁までの玄室部全長は3.3m、玄室長は1.33m、玄室最大幅は奥壁にあり1.72mを計り、玄室最大高は、1.44mを測る。  
平面プランは奥壁中央が丸い略楕形（筒型）に近く、天井は屋根形を呈し、両壁はほぼ垂直に立ち上がり五角形をなす。
3. 羨道 両側壁線がわずかに屈曲している部分を認めて、ここから奥壁側を玄室の意識が残存しているとしてみれば、羨道長は2m程度になり、開口部に向かって幅を減じていて、最も狭い開口部で0.87mを測る。その高さは崩落して不明であるが、1.4mほどであろう。

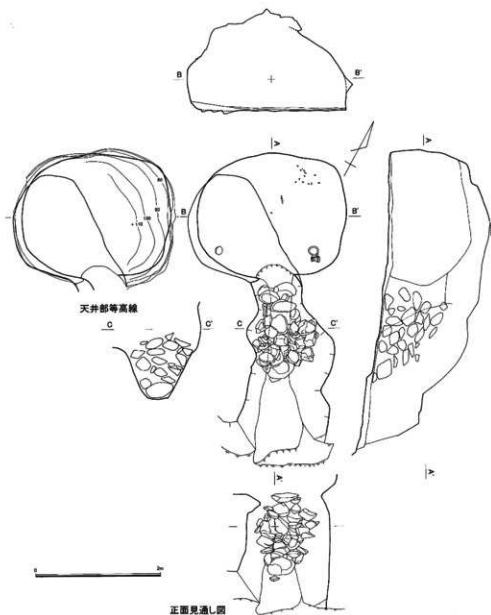


第12図 B群7号横穴実測図

4. 排水溝等施設 無い。
5. 封鎖施設 川原石によって封鎖されていて、2段が残存していた。
6. 墓前域 羨道部の前方は、急峻に窪んでいて階段を造って羨道部と繋がっている。
7. 遺物 玄室内からの遺物の出土はなかった。

## 8号横穴

1. 位置 本横穴は4号横穴の西約3.8mに位置し、B群の横穴群の中で最も西に位置する。調査着手前には完全に埋没していた。
2. 玄室 本横穴の玄室は、天井部の西半が崩落していたが、床面の遺存状態は良好であった。主



第13図 B群8号横穴実測図

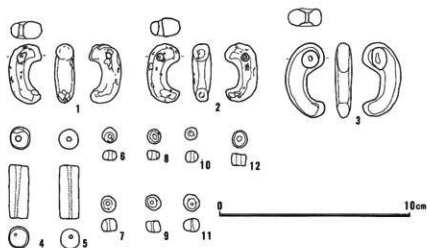
軸方位は $N-29^{\circ}-W$ で、開口部から奥壁までの玄室部全長は2.3m、玄室長は2.02m、玄室最大幅は2.54mで、崩落している玄室最大高は、1.3m程度と推定される。

平面プランは隅丸の略方形でも正方形に近く、天井はドーム形を呈する。天井部等高線は、奥壁と中心線の交点を0とし、これから10乃至20cmのコンタをひいたが、天井に向かうに従ってコーナーの意識は弱くなり、ドームに近くなっていくのが分かる。

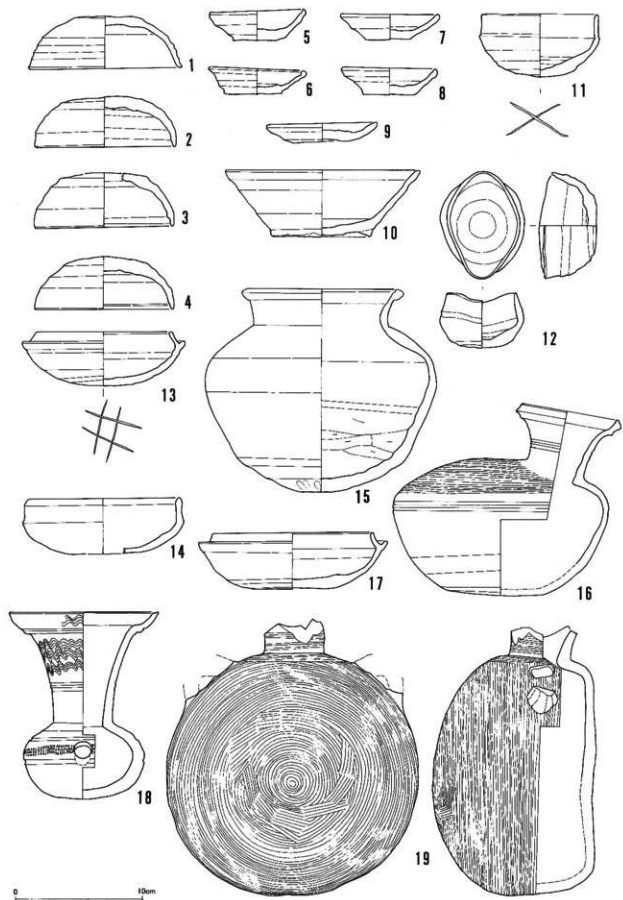
床面は開口部に向かって緩やかに傾斜する硬床で、また、玄室床面は中央部が窪むように造られている。

3. 羨道 羨道は、開口部先端でその幅を94cmほどに広げるが、玄室から幅30cmほどの一定した通路である。長さは、2.96mを測る。羨道部が崩落していて、その高さは不明であるが、封鎖石の状態から推定して、玄室の入口から開口部にかけて長さ約50cmほどまで天井が覆っていたと思われる、羨道部とすることができよう。

4. 排水溝等施設 無い。
5. 封鎖施設 高さ1mほどが川原石によって封鎖されていて、完存していた。
6. 墓前域 規模は不明。葉研堀状を呈する。
7. 遺物 土器は玄室の開口部側に2群に分かれて出土した。須恵器環（第15図17）1点と須恵器甕（第15図17）1点および土師器環2点が床面から出土している。また、ガラス玉9点と碧玉製管玉が13点が奥壁左隅から集中して出土し（第14図1・2・4～11）、1点が玄室のほぼ中央から刀子とともに出土した。これらの遺物の出土位置から推定すると、玄室中央から出土した1点の玉から追葬が予想され、玉や土器は片づけられたと推定できよう。



第14図 遺物実測図1



第15圖 遺物実測圖2

## 6. 考察 横穴と石室墳の形態をめぐって

### 1. 玄室形態の諸相

横穴の玄室形態には、その長期にわたる形態の変遷を概観してみると、その前半期に特に顕著であるが、大きくA) 長方形とB) 長円形の二者がその基本形としてある。これを石室墳に見ると、石室墳は羨道と玄室の接続形から両袖、片袖、無袖の三者にまず分類され、長方形の玄室が圧倒的に多く、A) の長方形に相当する。B) には胴張(石室)墳と呼称される形態が相当して、特に奥壁を平面に作るものと曲面に作るものがある。

このように横穴と石室墳の間に、その形態上類似する点が存在することについては、これまでも注目されてきたところであるが、さらに細部についての比較を次に進めて両者の性格について考えてみたいと思う。

横穴の場合は、天井部を合掌形に作るものがあり、中には垂木などを表現するものもあって、「家」を模したものであることがはっきりする例が知られている。この点は木芯粘土土室墳に極めて類似していて、土室墳はまさに横穴の形態を採用している点に注目したい。この棟木方向と羨道あるいは玄室中心軸の関係から、a) 妻入りとb) 平入りの二者が横穴の形態には区別できることについては既に分類が示されている(平野 1981)。

次に、これを先ほどの区分である、A) 長方形とB) 長円形の玄室形態を採る横穴と石室墳について観察してみると、石室墳では、天井石を架けて天井が平坦に作られていて棟方向が判然とするものは少なく、例えば、長方形を呈する玄室平面形の長辺部分に羨道が接続するものをb) の平入りと考えてみるが、これを県内で探すのは困難である。同様な事態は横穴の場合にも見られて、天井をドームに作るものや平坦に作り、正方形に近い玄室平面形の横穴も多いので棟方向ははっきりとせず、従って妻入り・平入りの区別は厳密にはなし難い。それでもまずは次の8類に大きく分類することは推論できよう。

#### ①類：長方形妻入り横穴

横穴の基本形態を成し、遠江から伊豆までその絶対数も多い。しかしながら、既にその設計方法について考察したように、その基軸は奥壁の midpoint と両開口部を結ぶ2軸であって、石室墳の場合と同じように直交座標系によりながら、かつ左右対象に造るが、玄室は略五角形を基本形とする(渡辺ほか 1988)。これについては石室墳との相違について述べる際に再度触れる。

#### ②類：長方形妻入り石室墳

県内では圧倒的にこの形態の石室墳が多い。

#### ③類：長方形平入り横穴

はっきりしない。

#### ④類：長方形平入り石室墳

本例は県内で確認できない。

#### ⑤類：長円形妻入り横穴

はっきりしない。

#### ⑥類：長円形妻入り石室墳

胴張りの石室墳は数多く見られるが、関東地方で散見されるように奥壁を円弧に作る例はない。実際には胴張りの程度に差があつて、長方形の玄室の両側壁が変形している程度のもはある。

⑦類：長円形平入り横穴大東町松ヶ谷横穴が典型であるが、公表されている資料では、他に掛川市本村横穴群A群1号横穴や同B群6号横穴、相良町小堤山1号横穴がある。長軸端を丸

く納めるものと平坦に作るものがある。また、天井部がドーム形を呈するものが多く、棟木方向は確認できない。群の中では比較的古手の横穴に本類がみえ、特に長大な切通し(龕段)状の羨道(あるいは墓前城と表現した方が良いかも知れない)を付設するものが多い。

⑧類：長円形平入り石室墳浜松市恩塚山A7号墳例がある。T字形と呼称されてきたが、玄室長軸長3.7mを測り、両長軸端は一枚石で作られ、玄室も羨室も胴張りの複室構造を示す。これは、本例が羨室を備えているものの、まさに⑦類の横穴の石室墳版であると言える。以上をまとめると下表ようになる。

	長方形玄室		長円形玄室	
妻入り形態	①類横穴	②類石室墳	⑤類横穴	⑥類石室墳
平入り形態	③類横穴	④類石室墳	⑦類横穴	⑧類石室墳

さらに、竪穴住居等の建物との類似に着目して、石室墳と横穴の玄室形態を単純化できる可能性があるようである。

特に横穴群では、各種の形態の横穴が集合する岡津A群のような例が散見されるが、これだとて群に反映した集落を構成する「住居」に形態差があることの証左とも考えられよう。

#### 竪穴住居跡の形態

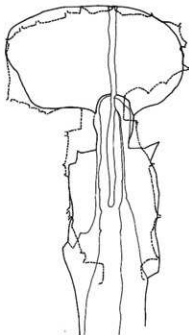
これもよく言われることであるが、流れ造と春日造の神社建築は古代の建築様式を深く取り入れ、妻入りと平入りの2種類の建物の系統の上に成り立っているのである。

勿論、発掘調査された竪穴住居にもこの平入りと妻入りの二者は区別できる。さらに石室墳にみる「片袖式」と「両袖式」の区別も、住居の入り口の接続方法の相違として捉え、入り口が中央から寄った位置に接続すると前者に、それが中央に接続すると後者に相当し、これも竪穴住居の調査例に確認することができる。

玄室は死者のための「家」であるが、しかしながら、来世と現世の建物の類同に固執すると、相互の形態差が目につくようになり、例えば、古墳時代の建物跡に、横穴にみる緩やかなカーブを描く壁面を持ったものを認めることはできない。むしろ長円形は多角形であり、八角堂などの形式の建物を基礎とすると想像して、一般的な方形の竪穴住居とは別の建物形式をその出自とすると考えたい。

#### 2. 胴張墳の問題

胴張墳の朝鮮半島の類例には、埴輪墳ではあるが、平塚特別市永和九年銘埴墓が4世紀半ばの例としてあり、日本における初期の石室墳に受容されたのは、福井十善の森古墳の例をはじめとして確かであった。そして、この胴張墳の形態が横穴にも採用されて、特に平入り形態の横穴でコーナーの消失が顕著になって平面形は曲線的になり、さらには羨道と玄室の接合部が角を落とすように展開すると想像することもできよう。この胴張墳を妻入りに分類することは理論上可能であろうが、それでは、長円形の平面形をもつ平入りの横穴についてその系譜をどのように解釈すればよいであろうか。



第16図 玄室比較図

ここで平入りの浜松市恩塚山A7号墳を取り上げてみる。この古墳は石を横んだ石室墳であるから、勢い玄室は多角形を呈しているが、第16図に示したように、その平面形が八角形であることに注目したい。7世紀代の遺物が出土しているものの、築造時期はそれを遡ると考えたい。この恩塚山A7号墳（破線）と、大東町岩滑松ヶ谷横穴（実線）の玄室平面形を比較してみよう。松ヶ谷横穴の平面外形線は一様な曲線を描くのではなく、両短径部（妻方向）が屈曲していることに注意する必要がある。これは岩盤状態や拡張の為とも考えられるが、最初は多角形を企図しての屈曲とも理解されよう。あるいは恩塚山A7号墳がなだらかな曲線の平面形を指向していたが、架構材の制約から屈曲したのかも知れないが、いずれにしても、一瞥しただけで平面形態が類似しており、想像をたくましくしてみれば「独立棟持柱建物」の屋根形状につながると考えられよう。

### 3. 編年的関係について

さて、横穴の掘削がその技術的な制約から、2軸を設定した企図でなされていることは既に述べた。この理論が蓋然性を持ち得るのは、平面形に方眼を掛けただけの企図論では奥壁に向かって開く羨道部の開きについて説明がつかず、2軸を準備してはじめて解決がついたことからも分かる。これを概略すれば、第11図B群6号横穴のようにシンメトリーな羽子板形を呈する平面形の横穴は略五角形であり、両開口部端と奥壁中点を結んだ2軸相互に方眼座標を設けて、ちょうどこの2軸で折り返すように平面形を決定していると考えることができたのである。

こうした羨道部が玄室に向かって開くタイプ（2軸企図型A）が出現する時期が設定できるようである。これ以前は細長い羨道が長円形の玄室に接続するタイプがあり、これ以降2軸のうち1軸が基本軸となる筒型構造のもの（2軸企図型B）に移り、やがては羨道が消失すると考えている。勿論、2軸企図の玄室形態にはバラエティーがある。

今回調査された2軸企図型AタイプのA群3号横穴とB群6号横穴のように、同形同大の横穴が認められて、これは同時性を意味していると考えられる。そして、これらに先行するB群4号横穴の段階でこの2軸企図型Aタイプが出現しているのである。繰返せば、長大な羨道の消失がこのタイプの出現と時期を一にしているようである。

### 形態の相違について

以上のように、石室墳と横穴の同時期の異なった墓制の被葬者集団の違いは、外見上の相違に現象すると観念して論を進めてみた。そして両者の玄室を比較してみると、同一ともいえる形態が見えて、石室を構築するか、あるいは横穴を造るかの選択は、例えば、横穴被葬者集団にのみに見える独自の玄室形態があれば推論しやすいが、そうではない。今のところ実は極めて「政治的」ともいえないような判断によって選択されたかと単純に想定されるだけである。

ただ、絶対数は横穴の方が明らかに多く、横穴墓制を採用した集団が隆盛するのは確かであり、換言すれば、点の形で入植する最初の集団が携えていた墓制が横穴であって、それは「長円形平入り」の玄室をもつ被葬者であったのだ。あるいは、上述した恩塚山B7号墳と松ヶ谷横穴の形態上



の一致から、恩塚山B7号墳の被葬者もその地に横穴が掘削できる山があれば横穴を造ったであろうと想像される。

これからは、横穴墓制を導入する前後での地域の変化を観察してさらに論を進めたいと思う。

#### 参考文献

- 平野1981：平野吾郎 「遠江における横穴群の分布と年代」『遠江の横穴群』 静岡県教育委員会  
渡辺ほか1989：渡辺康弘ほか 『岩滑清水ヶ谷横穴群 岩滑松ヶ谷横穴発掘調査報告書』 大東町  
教育委員会

## 7. まとめ

今回の調査成果を以下に簡潔にまとめておきたい。

1. 今回の調査で検出された8基の横穴は、二群に分かれたが、A群では1号、3号、2号の順で築造され、B群では、8号、4号、6号、7号、5号の順で築造されたと考えられた。
2. 築造の時期は、6世紀後半から築造が始まり、おそらく5号横穴はその規模から火葬骨を納めた横穴の可能性が高く、8世紀に下ると思われる。中でも、6号横穴と3号横穴が規模・形態が類似していることから、同時期と推定された。
3. 遺物は土器が主であったが、比較的初期に築造された8号横穴と4号横穴からは玉類が出土した。
4. 今回の調査では天井等高線を測量し、ドーム形の形状を視覚的に理解しようと努めたが、今後の調査例の蓄積をまってデータを消化したいと思う。

末尾ではあるが、無事調査を終了でき、ここに御理解と御協力をいただいた株式会社山下工業研究所ならびに町教育委員会に衷心より感謝申し上げます。

### 鳥見ヶ谷横穴群発掘調査報告書

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 大東町教育委員会

静岡県小笠郡大東町三俣620

TEL (0537) 7 2 - 2 2 1 1

印刷所 みどり美術印刷株式会社

静岡県沼津市沼北町2-16-19

TEL (055) 9 2 1 - 1 8 3 9

# 写 真 图 版



図版 I

1. 確認調査



2. A群3号横穴免見  
状態



3. 現地説明会



图版 II

1. A群1号横穴玄室  
状态



2. A群1号横穴石棺  
状态



3. A群1号横穴正面  
状态



図版Ⅲ

1. A群2号横穴正面  
状態



2. A群2号横穴開口  
部状態



3. A群2号横穴遺物  
出土状態

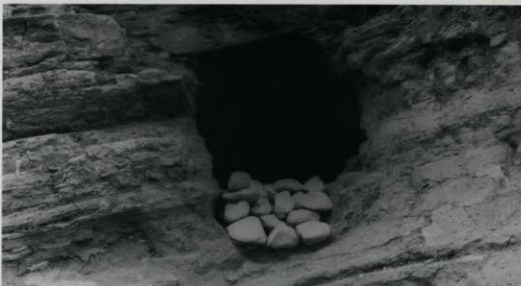


図版IV

1. A群3号横穴正面  
状態



2. A群3号横穴開口  
部封鎖状態



3. A群3号横穴封鎖  
状態（上から）



4. A群3号横穴玄室  
内壁状態





図版V

鳥見ヶ谷横穴群B群全景



图版VI

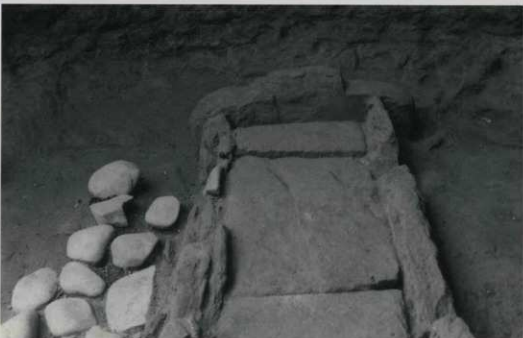
1. B群4号横穴开口部状态



2. B群4号横穴玄室内状态



3. B群4号横穴石棺西侧状态

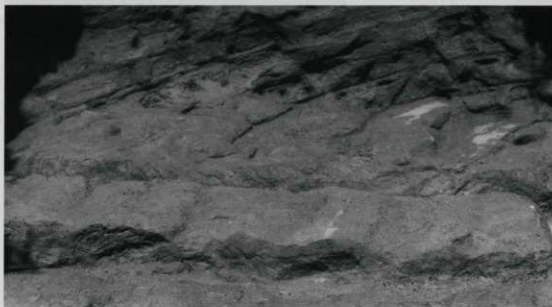


図版Ⅶ

1. B群4号横穴石棺  
東側状態



2. B群4号横穴石棺  
掘り方状態



3. B群4号横穴玉類  
出土状態



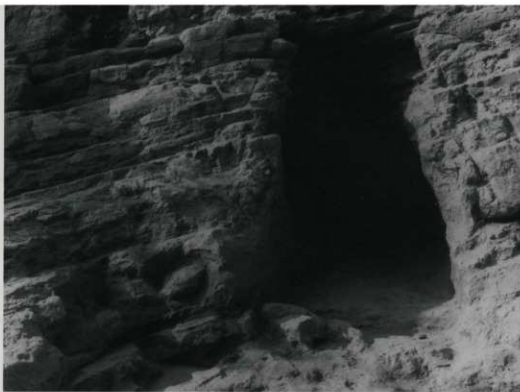
4. B群4号横穴須恵  
器出土状態



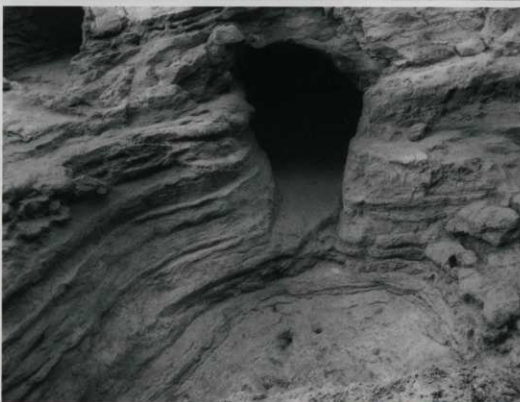
5. B群4号横穴封鎖  
部状態(上から)



1. B群5号横穴



2. B群6号横穴开口部状态

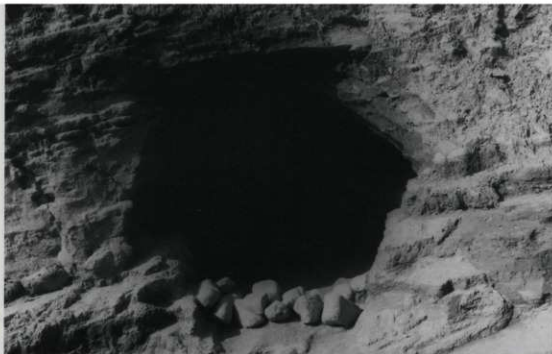


3. B群6号横穴奥壁状态



图版IX

1. B群7号横穴



2. B群8号横穴玄室  
状态



3. B群8号横穴侧壁  
加工度



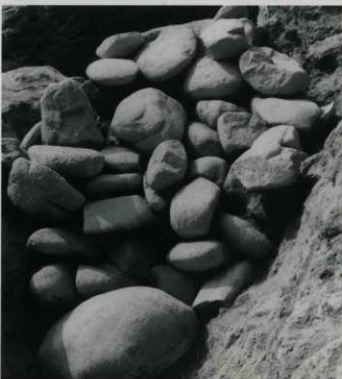
1. B群8号横穴墓道  
部状态



2. B群8号横穴玉類  
出土状态



3. B群8号横穴封鎖  
状态



4. B群8号横穴須惠  
器出土状态



5. B群8号横穴刀子  
出土状态





图版XI

出土土器

